



全10巻

青木周平・谷口雅博  
城崎陽子・倉住 薫  
編・解説

# 萬葉集歌人研究叢書

日本を代表する歌集『萬葉集』の歌人を研究する名著を復刻。



## 萬葉集歌人研究叢書 全10巻

青木周平、谷口雅博、城崎陽子、倉住 薫 編・解説

- |              |          |          |                   |
|--------------|----------|----------|-------------------|
| 1. 大伴旅人・大伴家持 | 佐佐木信綱    | 定価7,800円 | ISBN4-87733-208-1 |
| 2. 旅人と憶良     | 土屋 文明    | 定価5,800円 | ISBN4-87733-209-X |
| 3. 柿本人麻呂     | 武田 祐吉    | 定価6,600円 | ISBN4-87733-210-3 |
| 4. 人麿の世界     | 森本 治吉    | 定価7,200円 | ISBN4-87733-211-1 |
| 5. 人麻呂抄      | 吉村 貞司    | 定価6,000円 | ISBN4-87733-212-X |
| 6. 高橋虫麻呂     | 森本 治吉    | 定価5,400円 | ISBN4-87733-213-8 |
| 7. 笠金村・高市黒人  | 犬養孝・田辺幸雄 | 定価5,400円 | ISBN4-87733-214-6 |
| 8. 山上憶良・山部赤人 | 谷 馨・森本治吉 |          |                   |
| 憶良の悲劇        | 森本 治吉    | 定価6,800円 | ISBN4-87733-215-4 |
| 9. 萬葉皇室歌人    | 森本 健吉    |          |                   |
| 萬葉集作家の系列     | 五味 保義    | 定価8,800円 | ISBN4-87733-216-2 |
| 10. 萬葉女人     | 樋口 清之    | 定価4,600円 | ISBN4-87733-217-0 |

A5判/上製函入/クロス装 揃定価64,400円(税別) 平成16年4月末日刊行

ISBN4-87733-207-3(セット)

### ●クレス出版好評既刊書●

## 百人一首研究資料集 全六巻

吉海 直人 編・解説

- 第一巻 資料・目録 『尊円百人一首』『近衛百人一首』
  - 第二巻 注釈一 早川自照『七家輯叙小倉百人一首』
  - 第三巻 注釈二 『叢書野篁小倉百人一首演習ノート』
  - 第四巻 かるたの本 『百人一首かるたの話』
  - 第五巻 英訳百人一首 F.Dickins三点、野口米次郎
  - 第六巻 論文集 伊藤嘉夫氏の業績(異種百人一首翻刻)
- 揃定価44,000円(税別) ISBN4-87733-205-7(セット)

## 西行研究資料集成

全10巻

西澤 美仁 監修・解説

- |                     |       |
|---------------------|-------|
| 第1巻 増補 山家集抄         | 釈 固浄  |
| 第2巻 山家集詳解           | 梅澤 和軒 |
| 第3巻 西行法師伝           | 梅澤 和軒 |
| 第4巻 異本山家集 附録西行論     | 藤岡作太郎 |
| 第5巻 類聚 西行上人歌集新釈     | 尾崎 久弥 |
| 第6巻 西行法師名歌評釈        | 尾山篤二郎 |
| 第7巻 西行法師            | 窪田 空穂 |
| 第8巻 西行法師評伝          | 尾山篤二郎 |
| 第9巻 西行・西行研究録・西行の伝と歌 | 川田 順  |
| 第10巻 西 行            | 風巻景次郎 |
- 揃定価94,000円(税別) ISBN4-87733-159-X(セット)

クレス出版

# 刊行にあたって

國學院大學文学部

## 青木周平



国文学研究は今、大きな転換期にきていると思われる。今のような状況において、二つの方向性が模索されるであろう。一つは、学際的な研究方向。近隣諸科学と手を結んだ日本文化の発信としての大きな方向性である。もう一つは、国文学の最も基礎的な分野、訓詁注釈、テキストクリティクのさらなる徹底である。他分野から求められる研究としては、このような基礎研究こそ国文学研究の価値が問われているとも思われる。いずれにしても、二十一世紀の研究としては、いままでの研究の総括が必要となる。その際、特に要求されるのが、研究史の整理である。

万葉集は、国文学研究の中でも特に厚い研究史をもつ。最近では万葉集の作品を中心として従来の成果と問題を集約した『セミナー万葉の歌人と作品』全十二巻が企画され、その企画も一くぎりがつこうとしている。これは昭和四十年代以降の研究の総括を目指したものであったが、より古く遡ると、まだまだ研究史的価値をもった著作が埋もれているのではない。最近の成果のみが研究ではない。研究をおし進める原動力となった論が、その時点においてどのような意味をもっていたのか、その再検討も重要な作業であると思われる。今回企画されたクレス出版の『萬葉集歌人研究叢書』(全十巻)は、そのような研究史の見直しの観点から、すでに故人となられた方の学説の中から名著十二点を復刊し、二十一世紀の万葉集研究に資するものである。

もちろん、万葉集は研究者のみが必要とする作品ではない。歌をつくる人や一般愛好者にも広く親しまれている、日本を代表する歌集である。その点を考慮して、本叢書には入門的性格を持つ書も含めてある。今となっては手に入りにくい名著の数々をふりかえることにより、さらなる万葉集の研究が深まるにちがいない。この叢書が研究者はもちろん、大学、図書館、歌を愛する方々に広くよまれることを期待したい。

佐佐木信綱著『大伴旅人・大伴家持』

器 秋さらば見つつ思べと妹が植ゑし屋前の石竹咲きにけるかも

【説明】 砌(石畳)のほとりの瞿麥の花をみて、亡妾をしのんで詠んだ作。

【口譯】 秋ニナツタナラバ、見テ愛賞ナサルヤウニト、妹ガ植エタ庭ノ石竹ノ花ガ咲イタコトデアル。

【語義】 ○見つつ思べと すぐに下へかかり、妹が見つつ思べとて植ゑたの意。「見つつしぬべ」の「しぬぶ」は、卷一の「黄葉をば取りてぞしぬぶ」(一六)の「しぬぶ」と同じく、眼前の事物を心から愛賞する意である。第一・二句を作者の主観とみて、「見つつしのべとて歎」と解した略解の説は、語法上無理があり、拘はつた解釋である。

【鑑賞】 瞿麥の花の咲いたのを見て亡妾を思ひ出したのである。瞿麥が咲いたといふことが感動の中心であり、その瞿麥が、見て愛玩しなさいと妹の植ゑたものであつたといふのである。この平明な歌意のなかに、亡妾をしのぶ哀情が質感として動いてゐる。

大伴家持の歌

五味保義著『萬葉集作家の系列』

### 三 憶良、旅人の位地

人麿時代の作品は、人麿によつておぼはれた形であるが、その中に前時代の流れを汲むものも若干あり、相當の佳作として存在するのである。それらは山部赤人とか大伴旅人周囲の人々とかにその風格を傳へてゐるが、山上憶良、大伴旅人はそれらの人々と同時代に生きながら作品を示すこと少く、多作しはじめてからもそれらと違つた道を拓いたかに見える。又人麿の次に赤人や千年、金村といつた人々が、人麿の詠風の後を追つてゐることは、神龜から天平初年へかけて實に著しい事實で、中にも金村の如きは全く人麿の風を模し、人麿以外に出た部分といふものはきはめて少いと云つてよいのであるが、憶良、旅人は人麿の跡を追ひつづつこの流行からやや離れて、或る違つた地歩を歩んだのである。憶良には記紀歌謡にその手本をとつた例がいくつか存在し、それは構成の體裁や、用語の上で指摘出来るのであるが、それらがどれだけ憶良自身の滋養になり得たか、又人麿以外に一派を樹て得る力となつたかは、疑問とする所であつて、憶良のさやうな場合の態度は、人麿に對した場合と同じく、意識的な深みのある攝取消化といふものもなく、又反撥といふものもなかつたと思ふ。ただ人麿の題材の採り方が、かなり一途でさう多方面に

## 萬葉集歌人研究叢書 全10巻

1. 大伴旅人・大伴家持 佐佐木信綱  
昭和14年5月/厚生閣
2. 旅人と憶良 土屋 文明  
昭和17年5月/創元社
3. 柿本人麻呂 武田 祐吉  
昭和13年4月/厚生閣
4. 人麿の世界 森本 治吉  
昭和18年9月/昭森社
5. 人麻呂抄 吉村 貞司  
昭和18年12月/鎌倉書房
6. 高橋虫麻呂 森本 治吉  
昭和17年5月/青悟堂
7. 笠金村・高市黒人 犬養孝・田辺幸雄  
昭和19年1月/青悟堂
8. 山上憶良・山部赤人 谷 馨・森本治吉  
昭和13年8月/厚生閣
9. 憶良の悲劇 森本 治吉  
昭和21年9月/生活社
9. 萬葉皇室歌人 森本 健吉  
昭和17年6月/青悟堂
10. 萬葉集作家の系列 五味 保義  
昭和17年9月/弘文堂書房
10. 萬葉女人 樋口 清之  
昭和23年9月/蒼明社

武田祐吉著『柿本人麻呂』

後篇 傳記及び作品清賞

### 一一、卷 向 嬢 子

人麻呂歌集の歌の中には、所々の地名を詠み入れた歌がある。その大和以外の分は纏めて既に記した。此處には大和の地名のあるものを載せ、猶其の縁でその他にも觸れて行かうと思ふ。此等も人麻呂の傳記のある部分をなすものと考へられるが、いまだ之を詳にした者が無かつたのである。大和の國では、卷向附近の歌が多いのであるが、何が故に然るかは明にせらねばならない。其のほとりに思ふ人が住んで居たのだとなすが、順當な考へ方であるが、それには證明を要するものがあらうと思ふ。

泊瀬の齋槻が下に吾が隠せる妻茜さし照れる月夜に人見てむかも(卷十一、二三三三)  
泊瀬の齋槻は、尊い槻の大木とも解せられるが、それでは隠せるが生きて來ない。この齋槻は卷向の齋槻が嶽でその山を泊瀬方面から眺めて云つたものと思はれる。その下に私が妻を隠して

樋口清之著『萬葉女人』

### 打日さすみやをとめ

#### ——都への思慕——

をとめらにをとこ立ちそひふみならず西の京は萬代の宮(續日本紀)

稱徳天皇の寶龜元年、車駕河内の由義の京に幸し給うた時に、二百三十人の宮仕への男女が、青色の衣を着、紅の垂紐をおし垂れて陛下の御前でこの歌を歌ひつづ、おもむろに相並び歌垣を行つたことを見えてをります。時は春も闌な三月の候、野も山もなべて緑におほひ盡されたその中に、大唐の踏歌にも似たこの野遊びは、野遊びといふには餘りにも華麗でありましたことせう。暮れ惜しむ春のひと日のこの行樂は、「青丹よし等樂の都は咲く花の匂ふが如し」と歌はれた平城京の女性達の華麗さを示すに充分であり、また餘言を要しないと思はれます。その上の梅花折りかざして宮に打集うた大宮人達の、草枕旅の假寝の床の夢に、また大君の任けの司として任職にあつて如何ばかりか都を戀ふる日を重ねたかは、萬葉集中數多くの歌に見受けられる所でありすが

二日 柳黛を巻きて京師を思ふ歌一首